



Kameelpleister Zonder Weerga.



做銅版畫

東陽寫

*op de verhoek van Kieckij
geschreeven door
Speukiro*

長嘶不待九方臯，千里林良沒。
轉漕自有閑鞍，愉溫縵還愈海。
胎畏風濤，擬啖黃帝，拍南巧却。
惜益矣，血北勞，嚼草飲泉，也知。
足何曾伏櫪，靈逢遭。

詠藁駝

不用其故事

定山公愷

小菴山田草書



附言

余戲跡出橐駝故事得數十通劄為譯解授之
免輩以為譚資亦悅懽之一端筆研之魔障也玉
巖書肆之廝曰虎吉時從余向事見之私喜賺免曹
奪稿去上梓未示所謂黎棗何辜橫加涅點雖然
竊謂世之事著述者皆曰不朽苟非有德之言一時
傳尋亦漸滅莊周云朝菌不知晦朔近時著作往類
此何有於不朽今如此考一時戲墨唯博一祭可矣梓而
行之省膳寓之勞已何不朽是圖夫子論桓司馬石椁云不
如速朽之愈余於此篇亦自道之因領許公行甲申重陽
前一日它山識

星鳩叟士泰鍾伯美書

橐駝考序

書云珍禽奇獸不育于國是槩指無用異
物苟有所用則夫夏翟大龜熊羆狐狸儼
然列為貢之典聖人固不賤焉



國家盛德遠夷時貢厥方物客歲高蘭船載
駱駝牝牡各一隻至于長崎今茲來之江戶觀
者日為羣矣蓋其性馴善負重行遠又能
知水脉風候乳汁可以充藥物而其矢焚之
煙氣直上可以為烽火有用如此其孰賤之
故余抄出古人言及此者若干則欲以不世

書賈其間之乃持橐駝考者一卷未請余訂
正余乃校閱又書所得於上標更弁以闕子
圖及吉雉子所贈余番篆題字促之上木是
豈特為一異歟哉亦竊所以欲照

國家之德之致于天下後世也

文政七年歲次甲申秋九月之日撰于好問
堂中北窓下北峰山崎美成



書駝駝考首

予嘗讀鶴經龜經禽經牛馬經之類而竊
歎古人雅獸之類之妙也。必留意于此。不
必鳥。不翅。是也。陸羽之於茶。賈子經之於
酒。虞翻之於鼎彝。其他玉於蘭竹。牡丹
筆墨。雲刀劍。新版之類。皆有之。書存焉。是
不但幽人高士之趣。無不盡。蓋格物窮理之
端。而後涉世。講名物。本字之學。志咸。其
所資。既厚。其功。豈不偉哉。近者。崎。奧。高
舶。載來。駝駝。二頭。點者。視為奇貨。自。京
攝。而轉致于江戶。開場於兩國。樽。頭。親。者

眞明。日得。如萬鈔。可謂盛矣。嗟夫。然非敬
 之必貴者。而人喜之。新奇。多規。以爲後
 天。固。於。於。駝。者。而。人。不。知。之。氣。其。予
 友。宅。山。先生。著。新。駝。考。一。編。其。筆。墨。甚。善。其
 游。戲。也。其。考。之。備。亦。多。其。損。益。亦。先。其。爲。
 雖。就。陳。眉。公。之。言。名。豪。傑。其。志。亦。不。可。不。深
 漏。予。於。此。書。竊。有。水。子。眉。公。之。言。也。

如孫善菴良白甫撰

北海書



松千象鵞



ひ。日。月。の。あ。ら。ま。い。宮。山。先生。此。法。も。た。お。し。付。り
 れ。ける。を。り。文。つ。つ。の。う。又。物。乃。考。め。事。だ。一。巻。乃
 書。は。中。を。を。を。の。お。打。は。し。き。て。又。つ。も。て。ゆ。め。れ。
 又。此。程。世。に。の。ま。り。あ。り。を。せ。ら。ら。た。あ。う。ま。の。ゆ。め。は。
 し。を。り。と。つ。も。の。に。書。志。し。し。あ。ま。い。な。り。け。り。お。
 何。も。し。打。は。し。き。と。の。ま。り。し。大。江。戸。の。西。國。乃
 つ。り。た。い。何。れ。と。又。世。物。の。先。つ。う。な。る。年。々。又。出。き
 つ。れ。と。あ。れ。も。し。れ。も。た。く。し。の。目。を。な。の。ま。り。は。さ。ん。爲
 の。ま。り。け。の。み。あ。り。ま。れ。し。の。固。使。る。こ。記。さ。れ。り。
 たり。あ。り。し。の。ま。り。し。の。固。使。る。こ。記。さ。れ。り。
 さ。し。を。先生。曉。れ。ま。り。し。の。固。使。る。こ。記。さ。れ。り。
 多。く。一。時。の。た。り。あ。れ。た。り。し。の。固。使。る。こ。記。さ。れ。り。
 れ。い。こ。し。得。さ。せ。ま。り。し。の。固。使。る。こ。記。さ。れ。り。
 好。む。人。た。も。し。不。後。く。又。世。物。の。先。つ。う。な。り。け。り。お。
 先生。い。か。ら。お。り。し。の。固。使。る。こ。記。さ。れ。り。
 三



かり書れりといふは、たゞ物得ていふは、是を校合なり
 てたれし人のも、たゞそのうちに、おせりて、おけ
 るを、さあ、この、あみ、あたくて、や、あ、か、な、文、字、あ、つ
 り、た、ぬ、さ、る、り、山、崎、義、成、大、人、の、法、も、た、ま、の、り、て
 き、の、一、を、物、得、事、事、い、う、一、と、め、て、あ、の、り、た、ま、ひ、そ、の
 お、も、し、ら、る、き、さ、ら、な、め、り、さ、ら、い、こ、い、ま、お、け、た、せ、り、そ、の
 海、上、路、奇、集、と、い、う、書、た、の、ん、う、て、ま、さ、ら、に、も、な、な、考
 を、脚、く、海、ま、あ、り、も、た、な、ん、な、を、一、さ、ら、一、玉、つ、る
 五、を、あ、く、も、校、一、を、ら、り、や、ま、横、本、に、ま、つ、せ、お、け
 け、た、れ、い、は、ま、の、な、れ、る、そ、の、の、一、を、強、強、れ、う、ま、乃
 志、り、ま、つ、あ、り、う、い、ひ、あ、い、似、あ、る、尾、の、十、を、み、し、の、き、草
 を、か、え、り、や、そ、う、ろ、に、さ、ら、一、つ、ら、ふ、な、也。

文政七とせなの月も、た、れ、に、海 平武臣

橐駝考

江戸 它山唐公愷 稿 安西 武臣希吉 校

畧説 橐駝の外見

○ 橐駝 駱駝 又 爆牛 牯牛 封牛 封、音、峯、と、犖、不、作、る

橐駝と正名あり駱駝の駱ハ橐と犖ちりまが故に訛ま
 あり駝と橐と同一はこととも俗字を爆牛以下ハ同物異
 名あり其名の出るところ等下文於引証を得る知るべし。

一 橐駝考

驢馬たんくま。四牡しむ。又我馬維駱またわれまゐらむ。皇々きうきう者しや。禮記らいきにも駱馬らくま黒鬣くろしやう明堂めいどう。ヤあふふて駱らくの一字いちじ少せう駱らくと相類あひるいせざるを知しへ。

○字書不就しよしよて考くまハ駱らくの字じに驢ろ父ふ牛ぎう母ぼ類るいも驢ろ牝ひん異い駱らくと

即索駱まかちの索さくと同一どういとあり。諸書しよしよ不ふ形状けいせうを云いふ惣體そうたいハ馬まに

似にたり。或あるハ頭あたま身み頭あたまハ羊ひつじに似にて長ながき頂たかたさとる耳みみ脚あしに三さん此

節せつ。三さんつ一いつたさと脊せきに兩りゆう肉にく峰みねあり。鞍くら形がたの如ごとく即まかち肉にく鞍あんと云いふ。形状けいせうハ銅どう駱らく

今見いまる處ところを以もつて云いふ。尾おしハ牛ぎうの如ごとく。上うへの齒はか。董子どうしの云いふ

角かくの牙がハ上うへ齒は也なり。此こゝ言いふも董子どうしより。云いふまで考くまハ牛ぎうの屬しよか

らん。爆牛はくぎうかとの名なも何なにか。然しか定さだても宜よろし。亦またれども。既すでニ羊ひつじ首くびか

了しやう馬身ばしんかまハ別べつ一物いつぶつと云いふ。左傳さでんハ。鞭むちの長ながきも馬腹ばはらに及およぶ

脊せ不ふ肉にく隆たかり起おこる故ゆゑに肉峯にくみね也なり。封牛ほうぎうの名なあり。封ほうも土つちと高たか

積つたるなり。又また人の戚せき施し如ごとく。故ゆゑ不ふ偈せ者しやを形けい容ようして

駱背らくはいと云いふなり。柳宗元りゆうしゆんげんの文ぶんに種樹しゆじゆ郭索くわくさく駱らくの傳でんあり。則すなはち偈

儻たうの人ひとを云いふ。

○毛色けいろハ蒼褐そうかつ黃紫わうし多おほしとなり。白しろも黒くろも何なにかとも希まれなるべし。

其毛そのけと用もちて氈褥せんじよくふもさハ温厚おんこうなり。て狐貉こくたくもまさりて煖あたたく

なり。性せい寒さむく耐たへ暑あつを惡にくむ。夏なついハ毛けも落おちる。尚書しやうしよハ

渭ゑい不ふ鳥獸ちゆうぶつと希革きかくといふ時節じゆうせつ此こゝ駱類らくるいの毛けを緝あつめて罽毘けいひ

毛け席せきを織おる。駱毛らくけ緝あつ面めんを宋そうの時とき外國がいこくより獻けんせし事こと見みへり

○野駱やらくと家駱からくとの別べつ何なにか。按おんるに野駱やらくとこれを負おんん擔たんり用もちひ

て家駱からくと食餌しよくじ藥用やくじように充あつふ也なり。家駱からくの肉にく鞍あんと蹄つひのきハ肉城にくじやう

糟漬そうじりて食しべ味あじ甚おほ脆せき美みなり。又また肉鞍にくあんの中ちゆうに有ある臍せきと駱らく

義成云曾テ聞ク
駱駝ノ名色峯
双峯ノ二種アリ
一峯ヲカノユト云
双峯ヲトロンダ
リ云ト云又啞蘭
本草書ノウキニ
駱駝ノ説アリト
イハレフリニウス
ノ説尤モヨシト云
ヘリ

脂シすハ峯シ子シ油シといハ薬シ用シルシ也シ。是レ野シ駝シをシ勝シすシとシ也シ。扱シ其シ
肉シ多シ甘シ温シ無シ毒シとシテシ能シ五シ金シ錫シ銀シ銅シをシ柔シまシすシ。食シすシハシ痺シ風シ瘡シ
腫シをシ治シすシ。筋シ皮シのシ攣シ縮シ等シヲシ効シ有シ也シ。外シニシ駝シ乳シ駝シ黄シ駝シ毛シとシモシニシ
主シ治シすシ所シ必シ有シ也シ。尿シハシ乳シヲシ研シテシ鼻シヲシ嚙シハシ血シをシ止シむシ。又シ此シをシ
薰シ灼シとシモシハシ蚊シ蝨シをシふシろシ。是レとシ烽シ火シにシ用シテシ狼シ糞シにシ同シトシ云シ。

啞蘭シのシ説シトシロメシテシリスシ駝シのシ類シ身シのシ長シ九シ尺シ餘シとシテシ色シ鹿シ
ノシ類シをシ脊シ此シ肉シ右シノシ垂シ也シ。其シ陰シノシ方シ向シトシハシ駝シノシ殊シからシ也シ。
駝シハシ天シ竺シ等シのシ國シノシ多シノシ二シ種シ也シ。バシトシリシヤシ國シ産シとシ亞シ臘シ比シ亞シ此シ
國シ産シとシカシバシアシ也シ。ハシトシリシヤシのシ産シハシ脊シ上シにシ肉シ山シニシ有シテシトシロシメシテシリスシにシ
同シ。亞シ臘シ比シ亞シのシ産シハシ唯シ一シ山シ也シ。又シ胸シノシ大シ也シ。肉シ塊シ也シ。能シ
自シらシ五シ体シをシ載シセシテシ休シ息シをシすシ。二シ種シとシモシノシ何シとシモシ上シ齒シナシクシ。セシ

人シノシ馬シノシ代シトシテシ荷シをシ負シセシ。又シ軍シ中シニシモシ是レノシ乗シルシ其シ健シ也シ。其シ馬シにシ等シ。又シ背シ上シノシ負シハシ荷シ分シ外シノシ重シきシとシ道シもシ格シ別シ不シ遠シ也シ。六シ半シノシ起シ也シ。其シ性シ馬シをシ惡シむシ。又シ能シ馬シをシ恐シむシ。一シハシシシカルシタシ國シ合シ戰シのシ也シ。國シ人シ駝シをシ用シテシ敵シのシ馬シをシ其シ交シ小シおシとシろシ其シ形シ小シおシとシテシ安シんシとシをシ止シむシ。又シ得シ得シとシテシ歩シ戰シとシいシふシ。駝シのシ背シ上シノシ弓シ手シ二シ人シとシ乘シをシすシ。又シ説シルシ。駝シノシ壽シハシ五シ十シ歳シとシ度シとシ。百シ歳シノシ至シるシ也シ。好シテシ濁シ水シとシ飲シむシ。飲シむシ四シ日シヲシテシ渴シむシ。是レとシ軟シ柔シとシテシ嵩シ石シをシ踏シむシ。久シシシキシトシ耐シへシ也シ。腦シをシ酥シ小シ和シテシ吞シめシハシ癩シ癩シをシ治シすシ。膽シもシ同シ。尿シハシ水シ腫シとシ治シすシ。常シルシ乳シ也シ。再シハシ孕シにシ至シテシ止シむシ。アリシヤシスシのシ名シ曰シ駝シハシ畜シ類シ也シ。親シ子シ交シ合シのシ耻シをシ知シるシ昔シ駝シノシ中シニシモシ者シ有シ也シ。目シとシ掩シいシ欺シキシテシ母シ子シ交シらシしシハシ後シにシ覺シテシ大シニシ志シりシ主シ人シをシ嚙シ殺シすシ也シ。

本草駝考

○性多力于一物を肩よこす千斤是れ大數をいふ。百貫に並ぶるものなり。に至る。五月春一物を

載せんとす。其樹ハ足と屈めて是をうけ。悉く積り畢らされハ起き

さる也。其馴良なること斯の如く。日尔ゆるく健あるハ三百里一里ハ

次くも二百里餘をゆく。

○又能水の在る所を知り。水と畏る。又條々風の發するを知る。西北

の裔夷に流沙。禹貢に四方の限域をいいて。西ハ流沙。被とあまハ。流

沙。郡とて西域ハ。西の極界あること古より明かなり。中國の燠

此流沙と通るに千里。千餘里中。即ハ漢水。水をく。沙石の下に水向

し。もし人あると能く。其水脈の処に至り。足を以て地を踏む。ゆへ

其処を握り穿て水を得て飲と取る。伏流の処より汲む。水と地が

通して飲と。又青海と云ふ。北ハ夏月ハ熱風と云ふ。多くて旅人甚

かやむ事なり。風の起らんとするを。駝と早く二匹を知りて。鼻

と口と代沙中ハ埋めて毒風とさくる。人々を見るとき。速く毛氈の

類めて各口と面と代掩う。此毒風を遣り過る。此の如くさぐ

て彼熱風ハ中ハ毒氣口鼻と入る。樹ハ死す。至るに或は

大に病と發すると云。

齊の桓公ハ孤竹を伐り。時ハ春ゆき冬ハ迷惑して道を失

い。と云。老馬を放ち。これを師とて路を得り。と云。と。稀れり。と。

見入り。西域沙磧と過る。ハ索駝と師とを子。事を得て。後世

の人情ハ人ハ益とけ師と下と耻つ。韓退之ハ孟子の意

原ま。師の説を書き。人々人情世変と知るに。了。

○此畜ハ本蠻夷ハ土地ハ産して六朝。三國の兵を七兼く。建康

索駝考

都を東晋宋齊梁陳と云ふ。是れ南少の村北魏と稱す。跋氏の戎中へ南と正統と見て各付らる。今茲に云ふ。姑く世の汎稱に従て。隋唐よりしてハ中國も多くなると畜魏晋以後の事とす。唐よりしてハ中國も多くなると畜

東晋の亂よりして中國華復の地もハ腥羯の棲となす。其因は原く処ハ漢魏以来羌胡虜北降する者ハ塞外に居住せしめしるゆへ是より種類を以て遂に晋の天下を魚爛するに至る先劉淵を匈奴を晋陽に據り漢と號し石勒を胡羯を上黨に據り趙と號し姚氏を羌を符氏を氏を慕容ハ鮮卑をハハハ五胡十六國の亂といは是なり。郭欽は戎狄を塞外へ歸す

歸すの疏江統は戎を徙すの論載せて晉書に載見く其事を曉り。此時節よりして畜産の類もてハ四裔の異種を中國へ遷して用ゆる根を成るる原に素駝の牛馬と並用らるる東晋以後より始ららん

○蘇秦は楚に威王を説く。詳不後に。城考之ハ鄭衛の妙音み人と趙代の良馬素駝と成並稱をたす例の利口捷給り。楚王の欲不投を説く方々とも良馬の功せりやをられ。軍國運漕の用と亦趙代よりと専られを用ゆる代に北狄に近らると其國にのほろ素駝を半して是を慣れ使ひるや然とは裔夷の予録にハ非して固より軍國服役に用畜を。我國の古よりして既子然なり。

孟子の言、海内の地方千里の者九つとあり、八代を以て入とす、
也。は時を六國とも
七雄ともとせり。

○夏の禹王洪水を治めて高山大川を列し天下の貢賦を定めらる。
禹貢の一書は経済の大體を記し、其貢獻の物に禽獸ハ載せ
らざり、是ハ珍禽奇獸ハ家畜の家の法より、禹王の書に
稱する山海經洋未にハ、索駝を記して北方北山より多しとあり。
也。

○殷の湯王の時、伊尹宰相として、我狄の政と議せり、中ハ、
北狄の後類十三國の名を擧げて、索駝何何を貢獻せんと請ふと
あり、彼此を合せ考まへ、索駝ハ種類ハ古ハ北狄寒涸の地方に生
せしとも、覺ゆ。性寒不耐暑、然まとも其後ハ種類蕃息して西方にも

南方も生じ、遂に中國の用物とも成りたりとす。南方暑熱の地を生

○此獸軀幹巨大なりて、且備能あり、是我狄の産する所以なり。中
國々天地中和の氣の鍾るところ。列子に中土とあり。人も禽獸も
格別殊大なるあり。都て物の瑰奇偉大なるハ、天地の偏氣を
得先中國と四裔に比すれば、至る小なる事なり。是れ道理なりて、
注周の言に、中國の天地におりること、稊米の大倉不在、如し
と云ふ、証安らハ、非をさて物の精粹菁萃ハ少くして、渣滓糟粕
ハ多し、中國々精粹なる菁萃なるも、四裔ハ渣滓なる糟粕な
り。故に地も廣大なりて、物産も瑰偉なるを多し、索駝の如き、
也。

○諸この索駝北狄山海經周書戰國策に生じ、又西戎後天子傳西
索駝考楊雄長楊賦匈奴傳七

に生一。又南方西域見録新羅爾雅の註にも生一。互寒の地ふも。

暑熱地ふも生一。ハ種類の滋息蕃殖せりや特に東夷の見一。係ハ如何と思惟するに。禹貢の卷末に統轄せらるに。東

ハ海と有て東方に極界海多きことなり。是も世の齋のま

る地をハ海中の鯨鯢の如き大魚と出る。猶西北一の偉大

の禽獸を産す係如。法苑珠林一ハ山中の人も魚の大き木の

如きあふを知り海上の人ハ木の大き魚の如きあるを信せるを六

とあふり。四裔の地ハ瑰異の物を生ける天地自然の数あるを

と知ふ一足り。

○段成式唐李時珍明此言ふハ明駝と云ハ駝の性羞明説俗

の目翳にりて臥むに腹を地に著け足を屈りて腹下より日光漏

と露はるハ夜に且もと知り。則ち記出て夫より行くハ千里と

云ハ。樂史唐云ハ。異なり。未詳。何れハ是ちを云ふ。

宋人夜雪の詩一雪眼羞明夜轉飛。魏菊莊詩

人王屑に羞明と俗語と而已。一り羞明と字の如く明と

羞るの義を眼を病む者の暗黒の処を好む。明白の地とハ

厭いにくむの義なり。余著綿綉段批釋

右小節す也と下り引く諸書の大梗を括りて加るに臆説

私論を以て必を下文の引證を得。事實明白うつす。譚

柄ともに足り。此体裁ハ韓非子の内外儲説の例なり。

觀覽記臆し便しもハ下文と重複するに似るを研ること勿と

○引證并考覈

○山海經卷三云又北單狐の山三百八十里を錦山と云其陽

王多其陰ハ鏡多伊水に出ず西なる河ハ注其其獸

索駝を引北郭璞曰肉鞍あり能流沙中をゆく日に行

三百里其負千斤水泉の何處を知不

羅端良曰駝ハ外國の奇畜古語を索駝と云索

ハ囊あり他を負荷ありハ漢書の注を顏師今云駱駝と

索音の轉なりハ眼の李時珍吳任臣山海經の廣注ハ引

證宏博なりも羅願此説を駁して封牛と索駝とを別物とと

るハ透脱ならる見誤あり

它山按るに漢書藝文志ハ山海經十三卷形法六家の首一なり

作者の姓名を録せし。世これを夏禹の書とすハ誕妄甚し。

前賢とて此義を辨明せる更一つと其古書あるとつて。

まつこれを掲げる而已さて索駝の典故と云ハ唐の政陽詢ハ

藝文類聚明の俞安期ハ唐類函近時清康熙帝淵鑑類

函考に及小其書採収も富贍ありと陳脱紕繆も殊小

多一旨衆旨を引一隻眼を具ハ書ハ憤ハ

○逸周書

これを汲冢の書と云伊尹商書と献る孔晁曰周書ハ

ら録中類を以て相附と。注文も孔晁の字を漏して。正北空同

大夏莎車姑他胡代狄匈奴樓煩月氏娥犁其龍東胡請て我伊

請の索駝白玉野馬駒駘駘驥を以て献するを為令人湯曰善孔

注に十三國ハ北狄の別名なり代翟ハ西北界ハあり戎狄間の別

索駝考

按るに。此説不据也。凡此十三種の北狄悉く此畜を産するなり。其言ハ荒誕不經なるとも。其書ハ古書なり。是を班固二史に照せし。西北の地方に。橐駝の種類を多く出せし事明白也。周書王會ハ成王布政の記あり。中間殷の世の事を附載す。亦ハ是逸史殘編なる故なり。

又掲るに。此云北狄の種名也。漢の武帝の時。張騫傳及び子等。功を以て始て中國に通じ。國名も見ゆ。一策として。湯王聖人。一て尚秦皇漢武窮兵黷武の舉げなり。

○戰國策に。燕秦楚の威王。一説て曰。大王誠も能く臣の愚計を用ひは。鄭衛の妙音美人ハ多し。後宮も充て。趙代の橐駝良馬ハ

必も外既し。實人。卷五。楚策。威王の答。

此論も前も出せ。類函誤り。史記燕秦傳と。陳繆斯の如し。史記本傳も此事なり。

○東方朔云。腰裏奔亡して。橐駝を騰駕せ。七城王逸。是也。收て楚辞中も入る。引て楚辞とあるハ。疎と云下。

○楊雄云。聖武勃興して。穹廬を破り。沙幕を腦す。余吾を髓に。遂も王庭に躡へ。橐駝を駆る。長楊の賦。漢谷。出と也。顏籀。此交。注。加へ也。

○漢書に云。匈奴其先夏后氏の苗裔を淳維と云。唐虞以上。山戎。獫狁。薰粥。阿。北邊も居す。其畜の多き所も。則も馬牛羊其奇畜ハ。則も橐駝。驢。騾。駒。駘。驪。奚。馱。師古云。橐駝ハ能く橐囊を負て物を駄すると云なり。

按るに索駝の義よさに顔師古の此注とて正解とす
一。 歐陽詢俞安期、輦よく漢書を引くことを知て此ふ
及ハハ係ハ何ヲヤ。

○又云鄯善國本名ハ樓蘭水草を逐ハ驢馬あり。索它ソトハハ。

○又云烏孫國の大昆彌西方より入リ。右谷蠡王の庭より至リ。
單于の父行ト馬牛羊驢索駝とを獲たり。西域傳

○東觀漢記に云河西の太守竇融使を遣ハテ。索駝と獻を。
又南單于上書一テ索駝と献を。單于とく龍祠リウジ於テ索

駝と闘トウハメテ樂事トカス。
○白孔六帖に云西域龜茲歲朔シヤク一索駝と闘ハ一ハ勝負を觀

テ以テ歲の盈虚をトセ。

按るに和漢三才圖繪ツツ吉慈厄國畜産駝馬多トあり。
即龜茲キウシある一音近オンチきリ故に訛オヤル。

○又云五代回紇索駝を以テ耕一テ種ウ也。又南蛮の牛駝豹也。
○廣志コウシ義に云索駝ソト天竺國テンシクより出リ。又天竺テンシク北の

方に索駝多一

佛說經ブツセツキョウ愚グに云波羅奈國王夢一金毛の異獸を見て獵師ハ
命一山イマ入テ求一ハ得トクハ罪あり。天熱一テ死せんト云。銘

駝獸トカと云あり。見て怒イカリハ獵夫リョウフを負オカテ清池セイチハ至イテ涼を
得テ甦サマトリ。獸を見ミテハ金毛キンモウカキトモ殺コロト忍シノハレ。
獸シとトテ。人語ニンゴを御一獵師リョウシハ喻ユ一皮ヒを施セ一テニ與ユ。

索駝考

身肉ハ諸の禽虫の類ノ施ニ王皮を得て褥とあて。獸と
こま佛とろく身肉を受る者ハ八萬諸天の法と凶者に
まじり。義楚六〇法苑珠林卷第六十法苑珠林卷第六十
又百喻經ノ載する駝の皮を愛し。西濕と防として。白氈ハ
てある覆い。駝の皮を剥んに刀鈍し砥に磨せん
とまらハ身ハ樓上ニあり。下子に頼し。因て駝と砥と砥樓
へ上げしこと。麈の中の藪を。一駝これ食し。其首麈口に
竿より。駝を斫て麈を完せんと云しこと。皆此喻
あまとも。近く取て譬るに駝を以てまらハ。其多きを知
る不足也。
增壹阿含經云比丘僧の乱想を除去去ること。惡象駝

駝牛馬虎狼狗蛇蟻の如く。當り遠く離る。卷の三
十四に

○開寶本草ノ載む。駝ハ橐駝駱駝馬志録の曰野駝家駝と塞
北河西ノ生む。蘓頌本草宋本草曰野駝ハ今チ西北番界にあ
り。家駝ハ則人家中ニ畜養生息するものなり。

按るに橐駝ハ駱駝ハ別物ノ非を辨まへり見へり。然し
とも馬氏別物とを保時ハ野駝とハ橐駝の物として。家
駝を駱駝屠宰の者となむ。一蘓頌の云処を見しと
宋の時ハ駱駝と牛羊と同一く牽養し。食啖し。其
然り

○後漢書云東離國ハ天竺の東南に在る大國なり。土氣物
類天竺と同一。象ハ駱駝とに乘り隣國ニ往來す。西域傳

○華嶠漢書云南單于使遣。關至藩臣と稱し。

入て雲中に居り。上書して駱駝二頭。文馬十疋を獻じ。

○韓退之此詩に云。如此至寶存。豈多らんや。璽に苞。席に裹。

して可立致。十鼓。祗致數駱駝とあり。石鼓の歌。以下引く。

○唐書云。田緡。復綏銀の節度使。拜せらる。復開元

北宥州。城て。寇賊の路を扼し。橐駝を進。蔡を伐。助

をく。田緡。又云。賊。安慶緒。兩京を陷。子。掌。橐駝。以て内府の珍寶

を載せて。范陽。不貯。積。丘山の如し。史思明。ちとを取ら

んと欲す。云云。史思明傳

又云貞元の初。開輔。北宥兵。飛龍。陣營の。北駝。以て永豐倉

の米を負。禁軍。給。食貨志。

又童謡を載せて。神宗の。曰。山南。烏鵲の。窠。山北。金駱駝。鑠

柯。孔を鑿。せ。斧。子。柯。施。此二句。乃由。山南。云云

ハ。唐。云。して。烏鵲。其都。不巢。窠。と。か。さんと。也。山北。云

云。ハ。蛮夷。中國を。侵。來。大。虜。獲。駱駝。重載。て

去。らん。の。識。あり。五行志

按るに。以上。北。數事。を。就。て。之。を。觀。下。引。明。駝。の。余

不。因。て。考。し。ら。李。唐。の。世。て。殊。橐。駝。を。多。く。養。ひ。牛。馬

と。同。く。用。し。事。明。晰。あり。是。ハ。唐。北。時。回。紇。と。交。通。し。

回。紇。ハ。橐。駝。を。以。て。耕。作。を。な。す。程。多。く。此。畜

を養ふ事なまは。時々回紇を貢了。又唐よりも求め
徴して中國より用ふるならん。六典にも。駝馬を献す
る時ハ。厩堂に陳す所の文あり。是より回紇の歳時ハ。此
獸を貢獻して匱くらざるを知らず。是より。六典にも。
凡駝牛ハ。日して藁各一圍塩三合を給ると云文もあり。
是より索駝を多く畜い置るをも知らず。是より。
玄宗晩季楊貴妃の色に溺る。天下大亂。安祿山叛謀
して。西京覆没せしむ。肅宗靈武に即位あり。義兵と
徴さると雖賊の強大に敵し難く。遂に回紇へ援兵を乞
ふ。天下恢復の日。西京の金帛財寶ハ。回紇の得分と約せ
らる。故に克復の功ハ。速に成る。是れも災を後子貽せし

○外國紀畧云大秦國ハ人の長一丈五尺好て駝駝一騎を
唐類函
に
抄りて。扱此時より益回紇と往來聘問繁くあり也。

○我攬夷諺に云亞臘皮亞地氣きハめて温熱にして此地ハ
一種の藥物を出る。喝死。燂死。燂死。人の肉の集り燂せし
の化する。処諸疾に之を効驗あり。即輟畊録に載る。金銀寶
石珍珠獅子駝駝を産む。卷の三

亞臘皮亞。まじハ亞刺比亞。も作子。四大洲の中より。亞
細亞のりりあり。是駝駝の極熱の地にも生長する。是

下の土爾番と同一。

亞刺比亞の駝ハ肉山一つ
カア云云。駝の初子附マ

○又云恩魯謨斯此地小草木なり。其地の牛羊駝馬乳海乾魚を食ふ。同上。此國シ

裁攬夷諺ハ奇唇なり。古き刻行本にて。明人の譯を原書に。嗚蘭の説象胥の言まで。信をへきとハ採録せし唇な

是は摸搜の言ハ非也。

○西域聞見録云。捷拉巴哈台也。また準噶爾即烏魯の故地

なり。哈薩克と牛羊駝馬と交易也。卷の一

聞見録ハ清の七十一引姓名。樞圓と云。別の著と云。乾隆帝の時時。西域を拓し。始末を詳し記を記載典雅。て。一部の好書なり。

按るに。紀太史曉巖の記と云。此書不録す。併せ見て。其地ハ牛羊駝馬多きを知らに足る。聞見録不稱する。回部回子と云は。沈く西域の諸種とされ

たり。唐書ハ回紇又回鶻元史に回回。こな此西域をさハ也。

○又云土爾番復ハ極めたる炎熱にて。炎風地を西て起る。冬

日ハ祁寒大雪なり。南ハ云々。戈壁と云。碎砂乱石なり。水草なきの地なり。野駝野馬の類ハ百千群をかむ。卷の二

是も亦と炎熱の地。駝馬を生ずるなり。裁攬夷諺云。處と相符同也。

○又云庫車ハ大兵征伐有し。二十年。これを圍まる。時と城中ハ只

素駝考

五

羊七隻牛二頭何ぞ底定たり以來滋養生息して貪苦の小
回と雖も同小。よと牛羊駝馬あり。上に同

○又云烏什阿克蘇ハ回子の大城なり王田廣沃して牛
羊駝馬ゆく処群とあむ。上に同

○又云哈萨克ハ古の大宛なり地不平岡漫嶺おなく草生し
て野不被る牲養たぐひのこを食て腓字一易一宴會し駝
馬牛羊を以て饌とあむ。馬漣と酒とあむ。卷の三

○又云土爾扈特の準噶爾のためし逼らきて其部落と率い
て鄂羅斯に入る。鄂羅斯は額濟爾の地方を予へ遊牧
せしむ。烏巴錫鄂羅斯の名に至て既し七世休養生息して。駝馬
牛羊あげて計しへうらさるに至る。卷の六

○漢書云罽賓國ハ戸口勝兵おをく大國なり。封牛水牛象

大狗沐猴と出を師古曰封牛ハ頂の上の隆く起る者なり。
西域傳の上○下

按るに大月氏一封索駝師古曰脊上一封あふ也。
封とハ其隆高なること。封土の如く志うり。今俗呼て封
牛とあむ云云。彼と此と弁せ見よハ索駝と封牛とハ共
一物なり。て別種非し係事明白なり。郭璞は
依違模倣の説を見て。岐して二物とあさは。達識の士に
非ざるなり。

○後漢書云條支國周回四十餘里西海に臨む海水曲り環
地暑濕なり。獅子犀牛封牛と出を。西域傳

索駝考

太子賢封牛牛註下を是を前書て明くちも故文を省けふのり。

爾雅釋獸云爆牛音電郭璞曰即ち犍牛なる領上

肉爆映して起ふこと二尺たり了状ハ索駝の如し肉鞍

一邊あり健うに行むの八日一三百里今交州合浦徐閔縣

此牛と出む。牛屬

郭景純の説不よきハ索駝と二物なりとも顔師古の言明白にして疑ふへき非を辨ハ前小見へり爆映して起る云云爆映の義解難し它日を待て論をへし。

穆天子傳小云天子三月文山遊乃良馬十駟用牛三百

守狗九十妨牛音二百を獻子以て流沙をゆく郭璞云。

此牛よく流沙中をゆくこ索駝の如し。卷の四

按る良犬七千妨牛二百と既一其第二卷一出たと

郭氏も見落して此處に注せるなる。

山海經周書王會解穆天子傳の譎怪荒誕一人の手に

出る如し然とも古書に疑わるハ姑く取て引證

となむ。

○司馬相如上林の賦云慵音施猓犛郭璞曰慵ハ慵牛領上

肉堆あり即今の犛牛師古曰をハ今の犛牛各の本

傳

○本草綱目駝の條云西域傳云俗呼て封牛と云又慵

牛と云穆天子傳ここを物牛と云物ハお引く如く物

索駝考

不フ作フ字の形似ニ故誤ル。吳ニ任シ臣ト山ノ海ノ經ニの廣注ニも物ヲ作ル本草ノ記ヲ襲フ。

按ルに封ノ爆ノ妨ノ牖ノ一ノ音ノ轉ニ烈ノ厲ノ連ノ三ノ字ノ孔ノ音ノ通カ了ス。燭ノと潔ノと圭ノの三ノ字ノも音ノ通カ是ノらノ事ノハ方ノ密ノ之ノ通ノ雅ノマテ明ク了ス。余ハ記ノ臆ス而シテ已シ録ス。さレハ封ノ牛ノ以テ下ノ名ノも皆ク一ノ物ノマテ均ク是ノ索ノ駝ノトス。知ル不レ。

○博物志ニ云ク燉ノ煌ノ西ノ流ノ沙ノ外ノ國ノハ千ノ餘ノ里ノの中ニ水ノなシ。伏ノ流ノの処ニ人ノハシるコト能ハ也。皆駱ノ駝ノに乗て行くに。駱ノ駝ノハ水ノ脈ヲ知ルゆニ其ノ処ニ至リ也。ハ足を以て地を踏て進まス。人ノ其ノ処ニ掘リ穿テ水ヲ得ル。引ク也。

ハ。索ノ駝ノの性ノ質ノの事ノ。

○後周書ニ曰ク鄯ノ善ノハ古ノの樓ノ蘭ノ國ノ也。西北ノ流ノ沙ノ數ノ百ノ里ノあり。復ニ日ノ熱ノ風ノ多ク行ノ旅ノの患ノ也。云云。

○爾雅ニ翼ノ宋ノの雁ノ頤ノ不レ云ク駝ノハ外ノ國ノの奇ノ畜ノ脊ノ兩ノ峯ノ也。鞞の如ク其ノ足ノ三ノ節ノ物ヲ負シて千斤ノ至ル云云。

○埤雅ニ駝ノ毛ノ縵ノハ温ノ厚ノ也。取テ裘ニ也。復ニ毛ノを駝類ノとシて褐也。云云。

按ルに褐ノと褐ノと同一ノ。毼ノのたクひマて毛席ノ也。此本ノ文ノ由ル也。ハ毛席ノハ多ク駝ノ類ノの毛ヲ製スるカらハ。藪ノ子ノ卿ノ雪ノ和シて嚙と不梅ノ毛ノ也。同也。駝類ノの毛也。

索駝考

大

一。駝毛ハ服一て益ありと本草見へり。

○東西洋考明の張云啞齊ハ則蘓門荅刺一名ハ蘓文達那

西洋の要會なり物産ハ駝毛縛西のとき曾て外國より 献事あり 卷の四

○本草綱目云駝の状馬の如し其頭ハ羊小似と云云

見へ蒼褐紫黄の數色あり其色と圓と云其食すと齒其卧 毛に腹地不著け足を屈りて露明 酒陽ハ漏 なるを明駝

と名つく最よく遠きを行く 明駝の説ハ 未見出ゆ 按るに韓文第八卷云肥と推して牛羊と呼ひ實ると 載せて駝圖と鳴く征蜀の蔣之翹曰圓ハ 轄切音あ 圖ハ駝の鳴聲類 王安石 詩 駝の聲を圓と云

ハ候鯖録了 出た也。

又爾雅釋獸に牛小齡と云郭璞ハ 食の既 久

く又出して齒を云字書 云齒も 齡も 同一 牛小齡

○字典駝の字の注引くところ 博く諸書を采る悉く 本書

を前引く 又爰録せ 青海の北夏熱風ハ 云云又前説同

正字通駝の條下 引く處甚詳 故事を集録せる 事あ 彙書ハ

○瑣碎録云 駝峯か 齒老なる 齒少 徒ある 者ハ峯直一 駝の齡百年 五十年及 引

○漢書一云大月氏と。民俗錢貨安息と同。一封の索駝と出
を師古曰脊上一一封の了云云。西域傳○おの封牛の処
封駝の事係る。

○魏西雜志云烏魯木齊も又野馬野驃あり。又野駝あ
る。一峯も。商のきこめて脆美あるものなり。杜子
美麗人行いハゆふ紫駝の峯翠釜よつと云ハ是
を指して云今の人雙峯の駝を八珍の一とす。八其實と
る。本草綱目野駝の家駝との別。
按る。清の太史紀昀字ハ曉嵐博學能文の人なり。觀奕
道人と號を嘗て命を稟けて西域に使を故其著述処
の四書魏西雜志是我閑燕陽銷夏錄西域の事不及者多し

今ハ左右有ところの一書と而已引證を太史の博通
を家事ハ簡明目錄と見て知る。

○海錄碎事宋葉不云一封駝西域傳と引く云云。李義
山の詩に云酒と取る一封駝西域傳と引く云云。李義

○本草綱目云土番獨峯駝あり。
○西域見録に云哈拉替良ハ重山複嶺の中にて冬の日寒

甚し。十月に雪をてに一丈ふ盈。春ハ三月に雪始
素駝考

て融を此地に獨峯の駝を産む。嶺の四。北史云一峰の黑駝
駝下子見へり。

○南史云滑國ハ車師の別種あり。兩脚の橐駝あり。能く重
きを負ふて遠くゆく。以下に載るハ。異種と録せ。

李時珍曰南史云云と云。諸家のいさへ聞さる。所からし。

○洽閔記云于闐に小鹿あり。角細くして長し。駝と交て子を
生む。風脚駝と云。日不行こと七百里。其疾き事風の如し。

顧野王之玉篇云駝駝ハ驢父牛母と集韻云ハ駝ハ即
橐駝と云。鹿と交て生むるハ其異種なること明也。
按るに前漢の西域傳に于闐國ハ何と云。其地に馬と
生むるの如し。

○拾遺記云周の時小韓房と云。そのあり渠胥國より來り

玉駝を獻ふ高き五丈

○異苑云西域荀夷國山上に石駝あり。腹下より水を出
す。金錢をよひ手を以て承とる。即便對過也。惟葫蘆ふて承
ふ。その則にこまを飲すと得るとハ人をして身體淨香まで
仙とあらしむ。其國神秘して數をくへあらむ。

王駝石駝駝生物不や。刻鏤造製のものなり。や。文面し
明くあらむ。恐らくハ銅駝の屬あるへし。

○五代史云晋軍契丹を撃て大に敗る。德州にて車を喪ひ。
一の白駝駝に騎てこりぬ。

○明皇雜錄云哥舒翰つねに青海に鎮む。路をてに遙遠嘗

て使を遣へ。白駱駝に乗て事を奏せしむ。白駱駝日了り
くこと五百里。

○北史云迷密國西平元年使を遣へ一峯の黒駱駝を献
ふ。

○白孔六帖云南蛮寶利佛述駱駝何了。豹文よりて犀角且
耕一且来く。名けて牛駱豹と云。

○西域見録云郭罕ハ西域回子の一國あり。其人短小男
女とも皆長二尺あり。羊高さ八九寸長さ尺餘。牛馬た
りさ二尺不及ハも。駱駝の大さ内地の中國と驢の如し。乳の
椿園氏云是古の僬僥氏の裔。僬僥氏ハ家語に見たり。

○酉陽雜俎云木蘭篇ハ明駱千里脚多く誤て鳴の字を作

る駱の卧をに地ふ帖けて足を屈せを漏明かきハ。則ゆく
こと千里

○又云唐の時置驛馬つぎのハ明駱使を置く。邊塞の軍機ハ
非さしハ擅て發を逐事をあんた

○楊妃外傳唐史云明皇の時交趾より瑞龍腦香を貢せ。玄
宗貴妃ハ十杖を賜ハる。貴如私ハ明駱使を發。三杖を持
して。祿山。范陽に在し也。不遺不。明駱腹下ハ毛あり。夜よく
明々なり。

此説小よきハ明駱ハ腹下の毛を光耀を發せ不。因て
明駱と稱せ不也。佛の額より白毫ありて是より光明を發
せ不と聞し。駱馬の腹と一様の看を做をハ奇なり。ハ

索駱考

○南齊書云。托跋氏の泰始五年萬民谷の位と宏升了讓ふ。
 建武二年明帝の托跋氏を伐つて鎮南將軍王廣之司州不出。
 右僕射沈文季豫州不出。宏自ら衆を率以壽陽に至る。軍
 中黒糧の行殿何了。二十人と容ふ。鉄騎羣をかき牛車及
 い駱駝軍資を載む。妓女三十許萬人城を攻りて八公山に
 登りて詩を賦して去る。魏虜傳の以下引く処ハ。
 ○後魏書云。高祖魏元帝洛水を飲未も嘗て千里足の明駱を以
 て更互に恒州に向て水を取て饋了供む。
 ○齊志云。天保の末一人をして此寺竹林に往て經函を
 取らむ。使者志らざるを辞む。文宣高曰く我駱駝に乗て
 行ハ自ら到ん。使者如此して果して一寺門あり。數僧謂て

曰高洋の駱駝きとる也。使者不問。爾の天子何を
 求む。因て答ふ。經函并に尺八の黄帕を取らむ。僧命して
 取て與ふ。後其地を尋ぬるに又見へむ。高僧傳の載む。
 ○太平寰宇記。著史云。周武の世祖濠を征するに夜兵を
 つりハ一炬を持し駱駝のてて淮濠をよこす渡らむ。
 敵をやろきて。鬼魅の龍に乗厚とふ。大小敗ふ遂に其地
 を龍州と名付らる。
 ○三水小牘云。乾符中。劉秉仁江州の刺史となり洛を駱
 駝を將いて郡不至。因て風して廬山のもとに逸る。南土
 には此畜あり。人見て大に驚き徒を集めて是を射殺す。乃
 其旨を州へ白して曰廬山の精を得たり。劉公其事を訝

索駱考

既^き至^し不^ふを見^みる^る愀^{しう}然^{ぜん}とて曰^いふ^ふ吾^わ索^{さく}駝^た也^{なり}とて命^{いのち}して
江^え壩^ば不^ふ瘞^しめしむ。

按^あるに風^{かぜ}とい^い放^{はな}れ逸^{いつ}する事^{こと}な^なる。周^{しゅう}書^{しよ}の費^ひ誓^{せい}不^ふ馬^ば牛^{ぎゆう}其^{その}
風^{かぜ}とあ^ある。左^さ傳^{でん}僖^き公^{こう}四^よ年^{ねん}不^ふ風^{かぜ}馬^ば牛^{ぎゆう}も相^あ及^{およ}ぶとあ^ある。風^{かぜ}
の字^じな^なる。五^ご雜^ざ俎^そ一^{いつ}小^{せう}兒^に風^{ふう}のい^いめ一^{いつ}卷^{まき}と一^{いつ}保^{たも}と同^{おな}じく
らむ。

哀^あ公^{こう}十^{じゅう}四^し年^{ねん}春^{はる}西^{せい}のい^い大^{だい}野^や不^ふ狩^{しう}して叔^{しやく}孫^{そん}子^しの車^{くるま}子^し組^{ぐみ}
商^{しやう}麟^{りん}を獲^とりて不^ふ祥^{しやう}の物^{もの}とあ^ありて虞^よ人^{にん}に賜^{たま}ふ。孔^{こう}子^しあ^ある
を觀^みて曰^いふ麟^{りん}な^なる。左^さ傳^{でん}孔^{こう}子^し袂^{たもと}を以^もて面^{おもて}を掩^{おほ}ひ泣^ないて曰^いふ吾^わ
道^{だう}窮^{きゆう}せ^せる。穀^{こく}梁^{りやう}韓^{かん}昌^{しやう}黎^り曰^い惟^{ただ}麟^{りん}知^し不^ふへ^へのう^うを則^{すなは}ち^ちを不^ふ
祥^{しやう}と云^いふ亦^{また}宜^{なり}し。

○閑^{かん}窓^{そう}括^{くわく}異^い志^し。宋^{そう}の魯^ろ不^ふ云^い王^{わう}洙^{しゆ}暑^{しよ}と神^{しん}廟^{ぼう}不^ふ避^ひく。一^{いつ}の老^{らう}人^{にん}の
背^{せい}即^{すなは}ち僕^{ぼく}者^{しや}の脅^{おそ}の処^{ところ}のをきて白^{しろ}くな^なる。或^{ある}見^みる。明^{めい}日^{にち}
子^しな^なる。是^{こゝ}と見^みる。ハ乃^{すなは}ち索^{さく}駝^たふ^ふ。昨^{けつ}夜^や見^みる。ハ其^{その}精^{せい}なる
へし。

字^じ典^{てん}駝^たの注^{ちゆう}不^ふ又^{また}背^{せい}僕^{ぼく}な^なる。柳^{りゆう}子^し厚^{こう}郭^{かく}索^{さく}駝^たの注^{ちゆう}人^{にん}背^{せい}駝^た
して仰^{おほ}くこと能^{あた}ハ^ハする。云^いふ又^{また}佗^たも作^{つく}る。莊^{しやう}子^し德^{とく}充^{ちゆう}符^ふ
の哀^あ駝^た佗^た成^{せい}女^{にょ}英^{えい}が疏^{しよ}一^{いつ}佗^た駝^たと同^{おな}じ背^{せい}僕^{ぼく}ふ^ふ。按^あする
不^ふ新^{しん}臺^{たい}の詩^し不^ふ戚^{せき}施^し。魯^ろ語^ごもし。則^{すなは}ち駝^た背^{せい}な^なる。

○成^{せい}自^じ盧^ろ渭^{ゑい}南^{なん}よ^よる。晚^{ばん}一^{いつ}東^{とう}陽^{やう}驛^{えき}不^ふ過^かて雪^{ゆき}一^{いつ}遇^あふ。佛^{ぶつ}廟^{ぼう}一^{いつ}宿^{しゆく}る。
老^{らう}僧^{そう}あ^ある。夜^よ詩^しを吟^{ぎん}じて曰^いふ。褐^{かつ}を擁^{よう}一^{いつ}名^なを藏^{かく}一^{いつ}定^{てい}蹤^{そう}ふ。流^{りゆう}
沙^さ千^{せん}里^り哀^あ容^{よう}とこも。南^{なん}宗^{そう}の心^{しん}地^ちを傳^{でん}得^{とく}る。の^の後^{のち}此^{こゝ}身^みま^まと

に便ち雙峯（ツバキ）老（カ）と。明旦庭を視まハ。一老駝と畜へし
引（ツバキ）頼函の

○虞孝仁性奢華な。代遼の役一駝を以て函を載せ水と
盛魚を養て自ら給む。又孫承祐も太宗の北伐に従ふ。
駝を以て大函をハ一魚を養て自ら隨ふ

○清明投牽録云駝坊一使臣より坐して戸外の偶語を聞
に曰舎人きたる日萬里の役あるへ。然れども遂に此苦を
免さん。吾まさに奈何をへき。答ていふ。諫議自ら寛せよ。適
自ら免さん而已と。使臣いさう。是を見まハ。庭中の二駝
なり。次早不命有て一駝を差して軍衣を載せて蜀へ入ら
しめ。竟に蜀中不死せし。

○輟耕録云白湛淵先生が續演雅十詩の中云兩駝雪を
待て立り。終日飢て起を。一覺沙日黄。不肉屏何と擬す。屏に
足んと。是ハ沙漠にて雪盛なり。時二の駝と身の左右へ跋
立せしめ。晝夜動くことなり。断梗を以て兩駝の上へ架し。
其上へ毛席の類を掛け寒氣を凌ぐに其煖くを不事肉屏
に勝り。且心兵と起さず。卷の九

肉屏（ツバキ）ハ唐の申王の故事婦女を多くあつめ坐を圍ま
しむるなり。心兵（ツバキ）ハ慾情の起ふと云。

○西域閑見録云克什米爾ハ回子の一大國なり。葉爾羌よ
り西南馬行六十餘日にして至る。其國中ハ一氷山を
隔つ。人畜を以て到て。土人の駝牽を須て過る事を得ず。

了。鞍の五

此説と見よハ。氷山を踏中。に人毛牛馬のたぐいま
ても。駝馬の脊を負はしめて渉るに似たり。

○西陲紀事云。布拉克敦霍集占叛謀の時。上天子將軍雅爾

哈善命。土魯番より兵をよき。一日薄暮。城中

小駝の鳴く。色きこゆ。重を負ひ遠く行ふ似たり。霍集占逃

去る心なる。へりて。潜る將軍告く云云。卷の六

按。是回子駝を以て輜重を荷。駝を名なす。

○回疆風土記云。開齋の朝。賀の日。阿奇木伯克宰相の

鮮衣怒馬。金糸黄の阿渾帽。名なす。下衣服の制

服。多き者。文義。猶士君子と通。人。駝馬。飾。錦

鞍と以て也。鞍の七

按。是に駝馬を以て。鹵簿行列の供連となす也。駝小

肉鞍あり。然るに鞍をハ如何載る。其制知へらむ。

○又云。回子の宴會ハ。總て多く畜牲を殺を以て敬と也。

駝馬牛とも。上只とも。羊或ハ數百隻。いと尿。上に同

按。如此に。駝馬をハ。服任。負擔も用い。又屠宰

して。食餌とも。か。回々の地方。駝馬の多きを。知る

足しり。

○雜録云。穆爾。氷を。達坂。山を。少く。冰山。伊犁。烏什。の

あり。南北の。西踏。緊要。必由。孔道。あり。克噶。察。哈。爾

台。より。南行。して。雪海。あり。復も。冰雪。泥濘。して。人毛

索駝考

共六

牛馬も山坡側嶺羊腸曲徑を過く一たひ足と失へハ海中へ陥入るなり。うとと打越して二十里にして即氷山なり。土沙もなく草木もなく在在氷而已なり。氷の厚く其幾何尋丈と云を知らず。裂て隙の有る所より下の方を視まハ正黒くして其底を見も水流の声も雷に轟く如し。土地の人かの裂隙の処へ駝馬の骨を横に亘りて初て足を措き其所を踰ゆ事を得ならず。

按るに孔道ハ班史の西域傳に見へり。穴を穿ちて道をつけたる処を云張騫が傳記の鑿空と相類を。

索駝ハ固より珍禽奇獸の玩弄物に非ず。重を負ひ遠くゆき勞を助け力と竭も其能く偉なり。況マ枯骨に至

りて猶其用をおもこと此の如きを古に千金を以て駝馬の骨を買ふこと良し所以あふ哉記して一慨を付

○附銅駝

漢以来長安の城門に在る銅駝也。赤金を以て鑄象せよ。かまハ生類と相関りらる。然と雖類書索駝の部に。こま戎収采を叙時ハ措て論考せざるも關典に近く。遺憾なき非也。今諸書を援引して其始末を記す。こま亦稽古の一端なるへ

○洛中記云銅駝二枚宮の南四會道則十字街頭に在り。高さ九尺頭ハ羊に似たり。頸身馬に似たり。肉鞍あり。兩箇相對

索駝考

七七

を。按る。是ハ魏の明帝の更め鑄る所の物なる一

○鄴中記陸倕云二銅駝馬形如一長一丈高一丈足

牛の如く尾の長さ二尺脊ハ馬鞍の如く中陽門外一在

道を夾て相向へる。按るに是ハ晋の時石季龍の徙一

所の物ある一

○通鑑景初元年魏明帝冬十月長安の鐘簾索駝銅人承露盤

を洛陽一徙を盤折と聲數十里一閉一銅人重一致一

へうら一大銅を鼓一銅人二を鑄る一翁仲一云司馬門

列坐一

通鑑の注一云始皇鑄る所の銅索駝一此説疑一

一按るに史記始皇二十六年天下の兵を収め一咸

陽一聚めて銷一鐘簾金人十二を作る一重さ各十斤

宮中一置一結一始皇金人一を鑄一と一も一い一ま一と一索駝一

を鑄一と一る一事一通鑑の注一頗一杜撰臆度一に似一漢

書五行志一云始皇二十六年大人あり長一五丈足履

六尺一九十二人臨洮一見一ハる一故兵器を銷一て一こ一象

とる一の一卷一上一三輔舊事一云天下の兵器を銷一て一銅人十

二を鑄一る一各重一二十四斤漢世長樂宮門一何一魏

志一云銅人十一お一銅鑿を椎破一て一小錢を鑄一る一董卓

関中記一云董卓銅人十二を壞一て清門裏一徙一魏明

帝洛一詣一らんと一て載一せて霸城一至一重一て致一

へうら一後一石季龍一を一鄴一徙一を一并堅又一つ一て

索駝考

廿

長安に入てこまを銷せ。凡此諸書一言も銅駝の事も
及ふものあり。後漢書云蒯子訓ハ建安中客として
濟陰に在り神異の道あり後ハ逃去て所在を知らず。
後人あてて又長安の東霸城の邊までこまを見ふ一老
翁と共に銅人を摩率を相謂て曰たよく是を鑄るを見
るに五百歳に近しと。注に酈道元水經の注を引て曰
魏文帝黃初元年長安の金狄を徙を重して致せしをへうら
を因て霸城に留む方術傳云水經の注此も亦銅駝の
説ハ曾てあり或は此時に銅駝ハ既ハ洛陽に徙して金
狄の舊物のこ此霸城のこにたると多や。
世説云索靖ハ先識遠量あり人より天下の亂るべき

きを前知し洛陽城門の銅駝を指して嘆いて曰會汝が
荆棘中におふと見ん識量の篇有書本傳銅駝の事ハ
爰に至り僅に見へし蓋魏の明帝こまを洛陽に徙し
晋の武帝魏を篡して又洛陽に都し其地ハ秦よりして
傳來の索駝あるハこと此索靖が言ありたりさらハ秦
本紀云ハ索駝を鑄る事なくして通鑑魏紀の注云ハ
いなり。曰是ハ秦本紀適し書き漏りて其後の諸書こま
を承て索駝を鑄る事不及はざる也始皇の時必も索駝
城を鑄て漢晋と相傳へし事ハ明なる證據あり余
適し史記を閲して是を得たり史記ハ東方朔酒酣に
て地を據て歌て曰世俗に陸沈し世を金馬門に避く者

索駝考

九

少孫、曰、金馬門ハ官署の門ナリ。門旁に銅馬あり。故に是を謂て金馬門と云と。滑稽傳ハあり。滑稽傳ハ即ち褚少孫の補み処ナリ。褚少孫ハ是前漢元帝ノ成帝との間の人ナリ。面のおたは是を視て親しくことを説き書ふ録して、これを傳ふ信をへき事ことよ。平きハあり。さらば銅狄ナリ。銅駝ナリ。共ニ是始皇二十六年ノ鑄る処にして、漢々晋に傳ハリ。事毫髪の疑と容ふへく細月晋の惠帝大安元年の條人と銅駝の下に誅せん云々の注。史記の注と引て始皇銅駝と鑄るを云ふ。是は尹起華等。聽安。今本は此は也。余、此考を作るハ荀卿、所謂無用の辨不急の察こととす。甚しきハあり。但自ら謂に世に好事家と云あり。古董董昏畫を談ド。一点一畫の同一物一器の上に屑々

皓首衰年を通過せむ。俛馬孳々斃々を以て自ら期を抑ふるの心とや。宋儒の所謂格物窮理と云ふの古董昏画を談る者。近うらんや。余、此考の如き。近うらんや。虚心無我の人。質をへ。説郭の叔不所に論駝經あり。目ありて書あり。後世陶南村あらば。我、此書の如きも。馬、採収せらるるを知らんや。公愷再識

索駝考

索駝考

辛止

它山先生著述目錄

孝經攷觀 二卷

朱子ノ刊誤ニ本ツキ。孝經ノ論語諸君ト。抵悟スルヲ逐一ニ辨論スル。各十リ。

韓非子論解 五卷

慘激ヲ思ノ道ニ倍テ行ヘカラサルヲ論シ。且文字章句ヲハ能解セリ。

白鹿洞學規發揮并儒辨 一冊

讀論語集註 五卷

朱子ノ意ニテ。朱子以前漢魏傳注ヨリ出タル淵源ヲ録ス。

莊子全解 內篇七卷

清畫錄 二卷

清人ノ畫品人物ヲ論ス。張米庵ノ書畫舫ノ如シ。在刻。

執餘詹言 全十冊

唐宋ノ詩。注家ノ道及ハルヲ考ヘ。八家ノ文ノ妙ヲ發明シ。奇書ナリ。二本。近出。

江戸西國横山町三町目

和永屋金右衛門

了居士
お利大酒三様
はし一願

山多己

